

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 関 智英

本論文は、日中戦争時期の対日協力者について、それを和平陣営という概念で捉え直したうえで、彼らの言論にみえる将来構想や対日意見を分析したものである。研究者によって近年提起されている対日協力者という用語は、なるべく政治的負荷を避けて議論しようとする意図から採用されているといえる。これに対し、本論文では、彼らは日本との協力自体を目的としていたわけではなく、日本との戦争を早く終結させることによって各自の構想を実現しようとしていた点を強調しようとするため、和平陣営という見方を提示した。そして、彼らの主張は自らの政治的立場の正当性を訴えかけて中国輿論を説得しようともめざしており、ときには抗戦を掲げる陣営にとっても意識せざるを得ない存在であったことを指摘した。

第一章では、殷汝耕と池宗墨によって主導された冀東政権が国民党や国民政府とは異なる中華民国の正統政権であるという立場に立ったことを論じ、第二章は、上海市大道政府が掲げていた大道思想の由来を西村展蔵と蘇錫文との関係に注目して説明した。第三章では、日中戦争開戦前後において蔣介石を激烈に批判し「大漢国」建国を唱えた張鳴の言論と活動を追った。第四章は、中華民国維新政府の指導者であった梁鴻志・温宗堯・陳羣・王子恵が、日本と提携しつつ、日本を牽制する主張も行っていたことを明らかにした。第五章と第六章では、1939年から1940年にかけて上海で活動した興亜建国運動とその指導者の袁殊について詳しく検討した。第七章では、汪精衛政権が重慶国民政府と競うようにして憲政実施について積極姿勢を示したものの、それが挫折した過程を論じ、第八章では、孫文とも関係が深かった伍澄宇が和平陣営に加わっていった論理を解明した。第九章は京都帝国大学の高山岩男が漢民族は道義的生命力を欠いていると主張したことに対して、和平陣営の中国知識人が反論を加えたという論争について考察した。

本論文は、日本と妥協しつつも自分の構想を実現しようとした多様な主張・立場について、史料の博捜を通じて解明した力作と評価できる。そこで扱われた人物の多くについては、これまで本格的な研究がほとんどなかったことから、本論文の実証研究としての貢献度は大きい。当時、日本が行おうとしていた占領行政の性格、本論文で論じられた人物の議論を拘束していた制約の程度、彼らの主張が変化する契機など、更に検討を深める可能性が残されているものの、本論文に示された成果の大きさに基づいて、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと判断する。